

# 「昔話の営み」、「絵本の読み聞かせ」と幼児教育

岸本憲一良

Narrative of Folktale, Storytelling of Picture Book and Early Childhood Education

KISHIMOTO Kenichiro

(Received December 15, 2021)

キーワード：昔話、絵本、読み聞かせ、幼児教育

## はじめに

教育以前から、幼児の発達に大きな役割を果たしてきたものがある。それは、主として村の爺婆によって幼子たちに語られてきた「昔話の営み」である。筆者は以前、この営みは幼児の言語能力育成に大きく寄与しつつ、想像力の育成、道徳性の向上、社会の一員として生きていく力の育成等の働きを果たしてきたことについて明らかにした※1。

現代ではそのような営みがめっきり少なくなったが、それに代わるものの一つとして「絵本の読み聞かせ」を挙げることができる。

本稿では、改めて昔話の果たしてきた役割について考察するとともに、絵本の読み聞かせが果たす幼児教育の可能性について探っていきたいと考える。

## 1. 昔話が幼児教育に果たしてきた役割

### 1-1 昔話とは

昔を語った文学作品（物語）を「昔話」と呼ぶ場合もあるが、本来は識字以前からコミュニティの中で音声言語によって語り伝えられてきたものを言う。よって、昔話に作者は存在しない（誰かによってつくられたものには違いないのだが）。文学作品になったものには作者が存在する。昔話を作者が文字言語に再現したものを「再話」、それに作者のオリジナルが加味されれば「再創話」と呼ぶこともある。

昔話は、音声言語による民間の言語伝承、いわゆる「民話」の一分野に属する。民話とは、「民間に口頭で伝承されてきた説話、つまり民間説話（中国の『民間故事』、英米のフォークテールfolktale）の略称」※2である。福田晃は民話を①伝承者、②伝承の機会、③伝承意識、④証拠、⑤時制、⑥固有性、⑦叙述形式の違いから神話、伝説、語り物、昔話、世間話の五つに分類したが※3、そのうちの一つということになる。

### 1-2 二つの再話（再創話）の共通点から

以前、学生たちと昔話の中の「むかしがたり」※4の再話（再創話）2点について吟味したことがある。それらの共通点を探りながら、「昔話の頃の庶民の暮らし」と「昔話の果たしてきた役割」について明らかにしようとしたのである。

対象としたテキストは、岩崎京子の「かさこじぞう」、木下順二の「あとかくしの雪」である。まず共通点として、以下の9点が出された。

#### ① 貧乏

どちらも、登場人物が貧乏である。「かさこじぞう」の方は「じいさまとばあさま」の二人が、「たいそうびんぼうで、その日その日をやっくらしておりました」とあり、「そのへんまでお正月さんがござらっ

しゃるといふに、もちこのようにもできん」とある。また、大みそかだといふのに、「つけなかみかみ、おゆをのんでやす」むといふほどの貧乏である。「あとかくしの雪」の方は、貧乏に「何ともかとも」（繰り返し使われる）といふ言葉が付いている。また、「自分の食べるもんもろくないぐらいのもん」、「おらとこは貧乏で何にもない」とあり、「何しろ何ともかとも貧乏で、何一つ旅人をもてなしてやるもんがない」から、大根を1本ぬすむといふ行為に出る。どちらの中心人物も、「極貧」であつたことが容易に想像できる。

これは、昔話の頃（スパンは長い）の庶民のくらしを表しているのではないか。大多数の庶民が「極貧」であつたことを表しているのではないかと考えられるのである。

## ② 格差社会

「かさこじぞう」では、「長じゃどんのわかいしゅが正月買もんをしのこして」、「長じゃどんのやしきの方には行かず」と、「長者」といふ言葉が登場する。「あとかくしの雪」では、「となりの大きな家の大根をかこうであるところ」と、「大きな家」が登場する。

この「長者」と「大きな家」は（物質的な）「富」の象徴で、これら二つは「極貧」の対比として登場しているのではないか。このことは、当時の「格差社会」、しかも「非常に大きな格差社会」であつたことを表しているのではないか。

## ③ 冬、大根

どちらも季節は冬である。冬といへば、作物がほとんどとれない季節である。「極貧」を際立たせる。大根が二つのテキストに登場するが、大根さえもごちそうであつたと言へる。

## ④ 夜、雪（白）

どちらも、「いいこと」が「夜」に起こる。夜は、何か信じられないことが起こつても不思議ではないといふ気がする。昼ではリアルすぎて、「不思議なできごと」が似合わない。

どちらも、「いいこと」に「雪」がかかわっている。雪は冷たくて冬の厳しさも表すが、同時にふんわりした温かさも表し、雪の「白」は純粹さも表しているのではないか。

## ⑤ 自己犠牲、無償の愛、思いやり→いいこと、（ありえないような）幸福

どちらも、主人公は自己犠牲を払つて、他者に愛を注いでいる。決して見返りを求めていない。また、どちらも相手は、主人公にこうしてほしいとは求めていない。あくまでも主人公は、相手のことを慮つて行動している（「かさこじぞう」のおばあさんが、おじいさんを咎めないのも印象深い。おばあさんは、じぞうさまたちのこともおじいさんのことも思いやっている）。にもかかわらず、どちらの主人公にも「いいこと」、（ありえないような）幸福がおとずれる（「かさこじぞう」では、咎めなかつたおばあさんにも。じぞうさまたちは、おばあさんのことも知っている）。

これらのことは、自分のことよりも他者を思う思いやりの大切さを説き、生き方についての教へを表しているのではないか。

## ⑥ 不特定

どちらも、時、場所、人を特定していない。具体的な「他人の話」に終わらせないことを表し、想像をふくらませやすくなつていふ。

## ⑦ 伝聞

どちらも、「〜と」で終わつていふ。これは伝聞を意味し、語り手も聞いた話であることを表している。

## ⑧ 方言

どちらも、共通語ではなく、方言で語られていふ（正確には、2作品とも読み物であるので「共通語方言」。実際の昔話は、まさに地方の言葉で語り継がれた）。このことは、特定のコミュニティー、比較的狭いコミュニティーで語り継がれてきたことを表している。

## ⑨ 独特なオノマトペ

どちらの作品にも、一般には使われない独特なオノマトペが見られる。「かさこじぞう」では「ざんざら」、「とんぼり とんぼり」、「あとかくしの雪」では「とぼりとぼり」など。これらは、様子を印象づけ、聞き手の想像を助けていふ。また、オノマトペとは言へないが、「かさこじぞう」の「ひとうす ばつたら」、「じょいやさ じょいやさ」、「ずっさん ずっさん」も印象に残る。

### 1-3 共通点から見える昔話の果たしてきた役割

以上の共通点から、昔話がそれを聴く幼児たちに果たしてきた教育的役割について考えてみる。

### 1-3-1 道徳性の向上と自己肯定の役割

柳田國男は、「昔話」を以下のように定義する※5。

われわれがハナシといっているもののうちで、「昔々ある処に」という類の文句をもって始まり、話の区切りごとに必ずトサ・ゲナ・ソウナ・トイウなどの語を付して、それが又聴きであることを示し、最後に一定の今は無意識に近い言葉をもって、話の終りを明らかにしたもの、この形式を具備したのが日本では昔話、西洋の人たちは民間説話とでも訳すべき語をもって呼んでいる特殊の文芸である。この文芸は口と耳とをもって世に流布していた。

「時、場所、人を特定しない」、あるいは「伝聞である」という特徴についてはほとんどのむかしがたりに一致するところであるが、このことについて藤本朝巳は、マックス・リュティや柳田も同じことを述べているとし、「『昔むかし』という句が現実から距離を保ち、ある別な世界へ、過去のしていない世界へ踏み入ることをすすめており、同時に語り手は『昔むかし』という句（定式）でもって、自己を自己の物語から隔離している」と言い、伝聞については柳田の「話だから信じてはいけない。もしくはおもしろければそれでよいという心持ちがあつて…」を引用している※6。

が、柳田やリュティに異論を唱えるのははばかられるが、筆者は違う考えをもっている。

筆者は、サンタクローズの存在を信じている幼子を知っている。登場人物である動物が人間の言葉話すことに違和感を覚えない幼子を知っている。また筆者自身のことを言えば、私は夜、口笛を吹くことに違和感を覚える。それは幼い頃に祖母に聞かされた簡単な語り伝え（いわゆる迷信）に起因している。

時、場所、人を特定しないことで、爺婆は「いつかお前の身の上にも、とんでもない幸福がおとずれるかも知れないよ」ということを示したかったのではないかと考えるのである。

ほとんどの庶民は、生まれてから死ぬまでその土地を離れることもなく、「貧しさ」、「極貧」を当然のこととして受け止め、一生を終える。何の変化もないのである。

それでも人として、「自己を犠牲にしても他者を思いやるのは、とつても大切なことなのだよ」といった価値観や道徳性、「そのような行いは、誰か（神？）がどこかで見てくれていて、とんでもない幸福を与えてくれるかも知れないよ」といった宗教観を、爺婆（共同体そのもの）は幼子たちに伝え、人間存在の可能性を肯定したかったのではないかと考えるのである。

が、「～と」（～となむ語り伝えたとや）という伝聞の終句は、「決してそれは保障されるものではない」ということを表しており、「異常な幸福」を信じてポジティブに生きる力強さを与えたいが、証拠を示すことができないというやるせなさ、もの悲しさをもまたにじませているようにも感じるのである。

### 1-3-2 想像力、感受性を育む役割

柳田の名付けたものに、「耳コトバ」という術語がある。大藤ゆきは、「耳のはたらきについてみると、耳と心とは、目と心よりも直接にひびくようである。目で文字を読むよりも耳からきくことばの方が、音声とともにずっと心にひびく。民俗学の分類では、目で見えるものから聞くものへ、心に感じるものが一番大切とされている。」と述べている※7。「耳のはたらき」については、川島隆太も脳科学者の立場から同様の指摘をしている※8。

孫たちは耳から入ってきたコトバをしっかりと聴き取り、コトバをイメージへとつなげ、想像力を働かせながら、1-3-1で述べたような価値観、道徳性、宗教観等を培っていったことが推察される。

### 1-3-3 「言語習得」としての役割＝相槌から参加、習得へ

昔話による子どもの言語習得に関わって、益田勝実の次の指摘（言語獲得の段階）が興味深い※9。

- ① おとなが民話を語って、子どもに合槌を打たせつつ、話の場面場面をくっきりとイメージさせる段階。
- ② 同じ話を反覆語り、要所要所の歌や唱えことばや、リズムに富んだ文句を子どもの方に唱えさせ

て、部分的に語り手の側に立たせる段階。

③ 子どもに積極的に語らせて、おとなの方が合槌を打つ段階。

という諸段階によって、民族のことばは、発音・語彙・語法・文型を含めて、反覆演練され、いやでもそれに習熟していくことになるのである。〈幼児に語るむかし〉が、地方ごと詞に章まできっちり磨き上げられた形のものになっていて、一語もゆるがせず伝承してきたのは、そういうこの種の民話の生態と関係があることで、偶然ではない。

当然、昔話は方言で語られ、孫たちはその土地の言葉を習得していく。それに大きな役割を果たしているのが相槌であるというのがおもしろい。これは1-3-2で述べた「聴く」ということを意識させたものであろう。

筆者は、このうちの②「子どもが参加し始める」に大きな意味を見いだしている。昔話にリフレインや独特なオノマトペ、特徴的なかけ声や会話、歌などが多いのは、このためであると考えるのである。

#### 1-3-4 Collaborativeな営みによる「つながりの強化」を育む役割

家族間、あるいはコミュニティーの成員間の「つながりの強化」ということもまた、昔話の果たしてきた役割の一つであろう。筆者は、コンピテンシーの中でもとりわけ共創（コラボレーション）の重要性について提案している※10。

昔話は囲炉裏端で爺婆によって幼子たちに語られ、幼子たちはそれに相槌を打ちながら聴き、コトバを心に響かせ、想像を膨らませ、様々な「生きていく力」を獲得していく。まさにこの昔話の営みは、爺婆が幼子たちに「与える」というものではなく、「コラボレーション Collaboration」をしているということにほかならないのではないかと考えるのである。

また、昔話の内容から、お互いを思い合うことの大切さを学び、コミュニティーの成員の一人として生きること、周りの人々と共創していくことを学んでいったであろう。子どもはこの営みを通して、爺婆とのつながりだけでなく、「共同体の中の自己」を意識し、自分自身の存在を肯定していったのではないかと考えるのである。

## 2. 昔話と幼児教育

「幼稚園教育要領」の中で、昔話の再話（再創話）を含む「物語」が登場するのは、第2章ねらい及び内容の「言葉」においてである。1ねらいの（3）に「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる」とあり、2内容の（9）に「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう。」とある。ただし、このことは言葉にあるすべての内容につながるだけでなく、他内容、そして第1章に示されている上位の事柄にもはっきりとつながるものである。

「幼稚園教育要領」第1章総則の第2に、幼稚園教育において育みたい資質・能力として以下の三つが挙げられている。

- (1) 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
- (2) 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
- (3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

これらはすべて、昔話の営みを通じて総合的に育てられてきたものに共通するものであると言える。

また、上を受けた「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として10項目が挙げられている。特に昔話の営み、昔話の果たしてきた役割に関わってくるものとして、次の五つを挙げておく。

- (4) 道徳性・規範意識の芽生え

昔話が担ってきた役割の大なるものに、このことがある。特に思いやりが主題になっていることが多く、子どもたちは自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになっていった。

(6) 思考力の芽生え

友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり考えなおしたりする、自分の考えをよりよいものにする等は、昔話の営みの中でコミュニケーションとして行われてきたことである。

(7) 自然との関わり・生命尊重

昔話では、不思議な自然現象が起こったり動植物が擬人化されて登場したりすることが多い。自然への愛情や畏敬の念をもつこと、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物を命あるものとしていたわり大切に作る気持ちをもって接すること等につながっていた。

(9) 言葉による伝え合い

子どもが昔話を聴くあるいは参加することを通して、相手の話を注意深く聴く、豊かな言葉を身に付けるということにつながっていた。

(10) 豊かな感性と表現

いわゆる耳コトバによって子どもたちは想像をふくらませ、自らの感性を磨いていった。昔話を聴くこと自体が、大きく心が揺らぎ、豊かな心を育むことにつながっていた。

### 3. 絵本とその読み聞かせ

#### 3-1 昔話の営みに代わる絵本の読み聞かせ

子どもたちが囲炉裏端で、あるいは寝床で、お爺さんやお婆さん、お父さんやお母さんから昔話を聴く。近年、そのような機会はほとんどなくなった。

昔話は、永い永い時をつないで、それぞれのコミュニティーで語り継がれてきた聖火バトンのようなものである。筆者はそこに、本来すぐに消えていくはずの音声言語の「力強さ」を感じずにはいられない。

文明の発達と娯楽の多様化、コミュニティーの崩壊が、今、まさにその火を消そうとしている。

そのような現代、昔話の果たしてきた役割を受け継ぐ営みとして、ストーリーテリングや絵本の読み聞かせを挙げることができる。中でも絵本の読み聞かせは、読み手と聞き手とが同じ絵を共同で見ながらコミュニケーションやコラボレーション等、様々な広がり期待できる。聞き手である子どもたちは、絵に刺激を受けながら場面の様子や登場人物の心情を想像し、言語的にも情操的にも自らを成長させていくことになる。

先に述べたように、「幼稚園教育要領」の第2章ねらい及び内容の「言葉」において「絵本や物語」という文言が見える。1ねらいの(3)に「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。」とある。

昔話自体が音声言語による物語であるが、文字言語化された再話(再創話)を含む「物語」と「絵本」が、重要な文化遺産として認知されているのである。

昔話の営みも絵本の読み聞かせも共通点が多く、言語教育の分野として活用されるのはもちろんであるが、道徳性の向上や自己肯定、想像力や感受性の育成、コミュニティーの中の人間関係の形成等に大きく貢献していくものでもある。

よって絵本は、子どもたちの様々な力を向上させ、豊かな心を培っていくための様々な工夫がなされている。以下、このことについて述べていきたい。

#### 3-2 感受性=はじめて出会う絵本

昔話の営みと絵本の読み聞かせのいちばんの違いは、言うまでもなく絵本は絵が主体であり、子どもたちは絵を見つめながら読み手の音声言語を聴くということにある。よって、絵本の絵には様々な工夫が施されている。

子どもたちが初めて出会う絵本として、「いないいないばあ」がある。様々な絵本作家が多くの「いないいないばあ」を世に出しているが、それらにはいくつかの共通点がある。

まず絵の特徴としては、「顔が丸く大きく描かれ、正面を向いている」ということが挙げられる。また、その目鼻は簡単に描かれ、低い位置にある。

余郷裕次はこのことについて、「絵本の主人公の丸い大きい顔は、低い目鼻の位置などと合わせて、ベビーシマと呼ばれ、見る者の心を開き、共感を覚えさせる機能を持ちます」と述べ、さらに「絵本の丸い

大きな正面顔のキャラクターに見つめられることは、乳児期の養育者にやさしく見つめられた記憶につながっているのです」と述べている※11。

ここではキヨノサチコの『ノンタン いない いない』を取り上げるが、絵本との初めての出会いに登場するベビーシエマの正面顔は、かわいく親しみがわき、見つめ合いの安心感を思い出させてくれるものであると言える。この心地よさは、絵本によって感受性が育てられる入り口の心地よさであるとも言えるのではないか。

ベビーシエマ、正面顔に加えて太く揺れる線で描かれる輪郭も、親しみやすさ、安心感を与えてくれるものである。

見開きで「いないいない」、ページをめくって「ばあ」の構成も、聞き手である幼児を遊び（参加）に誘う効果をもっている。

言語的には、やはり簡潔であるが故のリズムと繰り返（リフレイン）を挙げることができる。これもまた聞き手の参加を促し、「ばあ」で幼児が声を上げる場面が容易に想像できる。

読み手も笑顔で楽しさを声に出して読み、「いない、いない…」で間をあけてやり、大げさにページをめくって「ばあ」と言ってやると、聞き手である子どもも参加しやすい。

また、「いないいないばあ」をする動物も、ノンタンからくまさん、うさぎさん、たぬきさん、ぶたさん、そして全員へと変化していつている。「いないいない」で顔を隠す物も、手、帽子、ブランケット（うさぎさんの場合は、「ばあ」で3人になっている）、絵本、リンゴと変化し、最後の全員の「ばあ」は再び手に戻っている。これらの絵の変化による工夫も、聞き手である子どもたちを飽きさせない。



【写真1】『ノンタン いない いない』

### 3-3 友達意識、道徳性の芽生え＝繰り返からストーリーへ

「いないいないばあ」から少し成長すると、リフレインを重視しながらも、簡単なストーリー性のある絵本と出会うことになる。

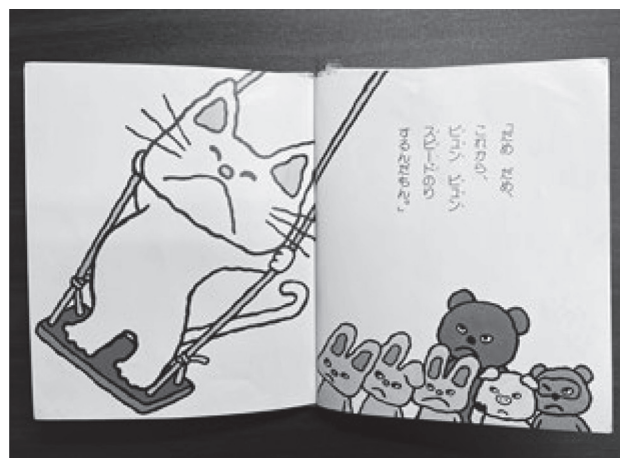
ここでは、2-2と同じくノンタンシリーズから、『ノンタン ぶらんこのせて』を取り上げる。

絵の特徴としては、先のベビーシエマ、正面性を受け継ぎながらも、顔に表情が現れる。写真2のページは、ブランコに乗りたいたがノンタンに独占されて怒っている動物たちと、ブランコを独占して交代しないノンタンの頑なな表情がよく描かれている。このようなことは日常起こる事象なので、幼児たちは登場人物に同化して読み進めていけるようになっている。

「ぶらんこのせて」とやってくる動物たちと「だめだめ」と交代しないノンタンとのやり取りが繰り返され、十まで数えたら交代することを約束してノンタンがこぐ。ところが、ノンタンは3までしか数えられず、仲間みんなが十まで数えてあげて交代するというストーリーである。

言語的には、先述のリフレインのおもしろさと会話を挙げるることができる。テキストのすべてが日常の会話文で通されており、絵からも言語からも、聞き手である子どもたちは登場人物への同化に誘われることになる。読み手が朗読に近い音読をしてやると、さらにその度合いは増す。

リフレインの「だめだめ」の後に続く言葉が、「まだぼく、ちょっぴりしかのってないんだもん」、「これから、たちのりするんだもん」、「これからかたあしのりするんだもん」、「これからビュンビュン、スピードのりするんだもん」と変化していくのも、だん



【写真2】『ノンタン ぶらんこのせて』1

だん高度な技を試したくなるノンタン的心情の変化をよくとらえていて興味深い。

道徳性の面からは、「相手の気持ちを慮って楽しさを分かち合う」という主題を読み取ることができ、子どもたちが自身の日常を振り返ることに誘われるようにできている。どんどん増えてきた動物たちが口々にノンタンに対して怒りをぶつける場面では初めてノンタンが描かれておらず、聞き手である子どもたちはブランコに乗りたい動物たちに同化して考えるようになるのである。

マイナスイメージの強い写真2の場面からみんな笑顔の写真3の場面への変化は、はじめAであったものが終わりにはA'（Aにあらず）になるという「登場人物は変容する」という物語の構造にも共通するもので、物語スキーマ形成の入り口であるという捉えもできる。

それにしても、写真2の場面では優位と言われる一番左で憎らしげに大きく描かれていたノンタンが、写真3の場面では笑顔で一番右（劣位）に位置している変容がほほえましい。



【写真3】『ノンタン ぶらんこのせて』2

### 3-4 友達意識から協働、社会性へ

ノンタンと同じくシリーズとして長く人気を保っている絵本に、『ぐりとぐら』がある。初版が1963年なので、半世紀以上に渡って多くの人に読まれてきたことになる。読み聞かせてもらった子どもが大人になり、さらに我が子に読み聞かせるという事例も多くある。

まず、表紙（写真4）の見つめ合っているぐりとぐらから、子どもたちは仲良しの友達であると気づくだろう。服装も同じである。が、色が違う。異なるキャラクターとして描かれているのである。余郷裕次は、青は鎮静、赤は興奮を表すとし、「『ぐり』の青い服は、まじめな『ぐり』の性格を表しています。『ぐら』の赤い服は、お調子者の『ぐら』の性格を表しています」と述べる※12。「個性の異なる二人の友達が、幸せを表す黄色のかごを持って、見つめ合いながら出かける」、これから楽しい物語が始まるぞという期待感を子どもたちに抱かせる表紙となっている。

森の奥へ出かけた二人は、料理をするためにドングリや栗、きのこなどを拾うが、そのうち大きな卵を見つける。持って帰れないので、調理用具を取りに帰って森で調理をすることに。カステラをつくるのである。

ここまで登場人物はぐりとぐらの二人だけであるが、調理が終わって出来上がるのを待っている時、森の動物たちがやって来て、その人数が徐々に増えていく。そして、出来上がったカステラをみんなで分け合って食べる（写真5）というストーリー展開である。

この集まってきた森の動物たちみんなでカステラを食べる場面は、「止め」の効果を引き出ししており、子どもたちはここで立ち止まってたくさんの動物たちに目をやるとともに、自分もそこにいるような幸福感を



【写真4】『ぐりとぐら』1



【写真5】『ぐりとぐら』2

味わうことになる。

ぐりとぐらが協力して大きなカステラをつくる、そして何よりも、できたカステラを多くの森の仲間たちと分かち合うというところに道徳性が見られる。

言語の面からは、歌のようなリズムある言い回し（ぼくらのなまえはぐりとぐら/このよでいちばんすきなのは/おりょうりすることたべること/ぐりぐらぐりぐら、かすてらづくりのぐりとぐら/けちじゃないよぐりとぐら/ごちそうするからまっいて）が何ととっても子どもたちの関心をひく。この部分での参加が期待できる。読み手は、歌うようにリズムよく読むとよい。

ぐりとぐらの会話のやりとりもほほえましい。アイデアを出し合うところが、簡潔な言葉でリフレインの要素もあり、同化しつつ楽しみながら物語の展開について行けるようになっている。

### 3-5 困難に向かって力を合わせる

『おおきなかぶ』である。これも初版が1962年と、60年にわたって子どもたちに親しまれている絵本になる。小学校国語教科書にも、1年生に長年にわたり採用されている。

ロシアの昔話をトルストイが再話し、内田莉莎子が訳したもので、絵は佐藤忠良が描いている。

まず、絵の特徴である。

成長したかぶの場合、どのページを見てもかぶをすべて描いていない。かぶの葉の途中で画面を切っている。これは、「かぶがとても大きくて抜けない」ということを表している。

もう一つ特筆すべきは、おじいさんたちがかぶを引っぱる方向である。写真6の絵本では右から左に引っぱり、写真7の教科書教材の「おおきなかぶ」では左から右に引っぱっている。絵本と教科書とを比べると、どのかぶを引っぱる場面を見ても引っぱる方向が逆である。絵はどちらも、佐藤忠良が描いている。

これは、読み進める方向の違いによる。絵本の方は文字が横書きなので、左から右に読み進める。それに対して、教科書は文字が縦書きなので右から左に読み進める。いずれも、引っぱる方向が読み進める方向と逆になっている。これもまた、成長した大きなかぶが一筋縄では抜けないということを表しているのである。写真6と7は同一場面であるが、佐藤が縦書きの教科書用に改めて描き直していることが興味深い。

子どもが文字を目で追えるように成長したころ、改めて大きな抜けないかぶであることを無意識のうちに実感できるようになっている。

言語的には、リフレインが用いられている。

おじいさん一人では抜けないから、おばあさんと呼んでくる。二人でも抜けないから、おばあさんが孫と呼んでくる。それでも抜けないから犬を、そして猫を、最後にネズミを呼んできてみんなで引っぱり、「やっと、かぶはぬけました」で終わっている。かぶを引っぱるたびに「うんとこしょ、どっこいしょ」の掛け声が入るが、ここで子どもたちの参加が認められるのは明白である。

また、一人ずつ増えていき、そのたびにかぶを引っぱる叙述も関心が湧く。おばあさんが来ると「おばあさんがおじいさんをひっぱって、おじいさんがかぶをひっぱってー」、孫が来ると「まごがおばあさんをひっぱって、おばあさんがおじいさんをひっぱって、おじいさんがかぶをひっぱってー」と続いていき、最後は「ねずみがねこをひっぱって、ねこがいぬをひっぱって、いぬがまごをひっぱって、まごがおばあさんをひっぱって、おばあさんがおじいさんをひっぱって、おじいさんがかぶをひっぱってー」となる。



【写真6】 『おおきなかぶ』 1



【写真7】 『おおきなかぶ』 2

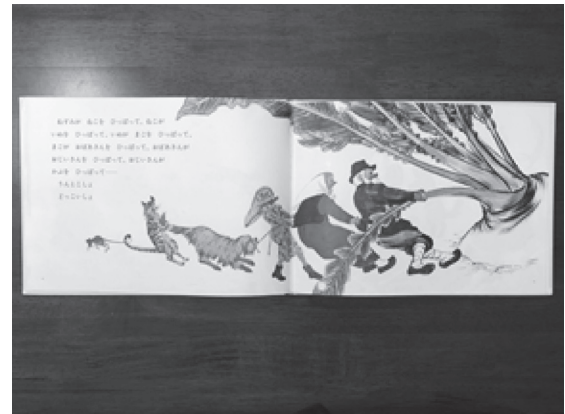


「かぶがぬけない」表現も、「ところがかぶはぬけません」からはじまって、「それでもかぶはぬけません」「まだまだかぶはぬけません」「まだまだまだぬけません」「それでもかぶはぬけません」と続く。子どもたちは知らないうちに、七五調を楽しみながら語彙を豊かにしていくことになる。最後に大きな文字で「やっと、かぶはぬけました」とあり、ここで聞き手である子どもたちも達成感を味わうことになる。

歯切れよい言葉のリズム、繰り返しの予想が、掛け声から語りへと参加を促してくれる。

道徳性としては、やはり「協働」が挙げられる。一般的には仲の悪いとされる動物たちが協力すること、大きな力からはじまってどんどん小さな力が加わっていき、最後はネズミの協力によってかぶが抜けるのである。

それにしても、全員で引っばる写真8の場面であるが、みんなががんばって力を込めて引っばっているのはよく伝わってくるが、それぞれの前の人とのつながり方がおもしろく、ネズミと猫にいたってはお互いの尻尾を絡ませているといったあたりが実にほほえましいのである。



【写真8】 『おおきなかぶ』 3

#### 4. 今後の課題

昔話の営みに代わる現代の取り組みとして、絵本の読み聞かせに焦点を当て、その可能性について探ってきた。

昔話の役割として明らかにした道徳性の向上と自己肯定、想像力や感受性を育む、言語習得、Collaborativeな営みによる「つながりの強化」を育む等を観点に、幼児教育で重視されている事柄を吟味し、絵本やその読み聞かせとのつながりについて考察した。

子どもの発達過程を考慮に入れつつ、広く読まれている絵本を対象にして吟味したが、結果、絵本そのものも持っている魅力が、そして絵本の読み聞かせという営みが、現代の幼児教育において重要な役割を果たし得ることが明らかになった。

今後は実際に発達過程に沿った絵本を子どもたちに読み聞かせ、反応を吟味しつつ、よりよい絵本の選定、よりよい絵本の読み聞かせの在り方等についての考察へとすすめていきたい。

#### おわりに

囲炉裏端で爺婆が語って聞かせてくれる昔話、それは永らく子どもたちにとって、他に娯楽のない時代の大きな大きな楽しい営みであった。日が暮れると爺婆にお話をせがむ子どもの様子が、容易に想像できる。

爺婆もそんなに多くの話を知っているわけではない。同じ話を、繰り返し繰り返し語った。それでも子どもは話を聴くのが楽しくて、決して飽きることはなかった。むしろ逆に喜んで聴き、参加しながら新たな想像をふくらませ、豊かな心や豊かな言語を獲得していった。

爺婆には「子どもの教育のために昔話を語る」という意識は決してなかったであろうし、子どもたちもただただ楽しい時を過ごすという思いしかなかったであろう。

絵本の読み聞かせは確かに幼児教育につながってはいるが、昔話がそうであったように決して教育のために読み聞かせるなどと考えるのではなく、読み手である大人も聞き手である子どもたちも心から楽しむことができるすばらしい営み、すばらしい時間にしたいものである。

#### 参考文献

岩崎京子：「かさこじぞう」『新しい国語 二下』，東京書籍，平成26年。

- 木下順二：「あとかくしの雪」木下順二・赤羽末吉『わらしべ長者 日本民話選』，岩波書店，2000.
- 浜本純逸ほか：『実践国語研究別冊No.81 岩崎京子「かさこ地ぞう」の教材研究と全授業記録』，明治図書，1988.
- 福田晃・常光徹・斎藤寿始子編：『日本の民話を学ぶ人のために』，世界思想社，2000.
- 川森博司：『日本昔話の構造と語り手』，大阪大学出版会，2000.
- 文部科学省：『幼稚園教育要領解説』，フレーベル館，平成30年.
- 波木井やよい：『読みきかせのすすめ』，国土社，1994.
- 笹倉剛：『感性を磨く「読み聞かせ」』，北大路書房，1999.
- ドロシー・バトラー著、百々佑利子訳：『クシュラの奇跡—140冊の絵本との日々』，のら書店，2006.
- 岡本夏木：『幼児期—子どもは世界をどうつかむか—』，岩波新書，2005.
- 岩井寛：『色と形の深層心理』，日本放送出版協会，1986.
- 藤本朝巳：『絵本はいかに描かれるか（表現の秘密）』，日本エディタースクール出版部，1999.
- 中川素子・今井良朗・笹本純：『絵本の視覚表現 そのひろがりとはたらき』，日本エディタースクール出版部，2001.
- キヨノサチコ作・絵：『ノンタン いない いない』，偕成社，1988.
- キヨノサチコ作・絵：『ノンタン ぶらんこのせて』，偕成社，1976.
- なががわりえこととおおむらゆりこ：『ぐりとぐら』，福音館，1963.
- A. トルストイ再話・内田莉沙子訳・佐藤忠良絵：『おおきなかぶ』，福音館書店，1962.
- 教科書教材：「おおきなかぶ」『あたらしいこくご—上』，東京書籍，令和2年.

## 引用文献（※の説明を含む）

- 1 岸本憲一良：「『探究読み』の入り口としての比べ読み～『昔話の頃』『昔話の役割』を探る～」『国語教育探究No.30』，国語教育探究の会，2017.  
岸本憲一良：「昔話、その貴き営み」『やまとNo.510』，奈良県教育振興会，2021.
- 2 福田晃：「民話とは何か」福田晃・常光徹・斎藤寿始子編『日本の民話を学ぶ人のために』，世界思想社，p4，2000.
- 3 2に同じp5
- 4 稲田浩二は日本の昔話を、「むかしがたり」、「動物昔話」、「笑い話」、「形式話」の四つに分類した。稲田浩二編『日本の昔話上・下』筑摩書房，1999 ※上巻p12、下巻p14
- 5 柳田國男：『口承文藝史考』，中央公論社，p118，昭和22年.
- 6 藤本朝巳：『昔話と昔話絵本の世界』，日本エディタースクール出版部，p12～15，2000.
- 7 大藤ゆき：「耳コトバ」日本昔話学会編『昔話—研究と資料—20号 昔話と子ども』，三弥井書店，p26，平成4年.
- 8 川島隆太：「脳科学から見た国語力」『教育委員会月報No.669』，文部科学省，p8～15，平成17年.
- 9 益田勝実：「民話の構造的把握がはじまっているらしい」西郷竹彦編『国民教育における民話』，明治図書，p26，1969.
- 10 岸本憲一良：「『共創力』を育てる」中渕正堯監修、石丸憲一・岸本憲一良・香月正登編著『「新たな学び」を支える国語の授業上』，三省堂，2013.  
岸本憲一良：「説明文のアクティブ・ラーニングのポイント『Collaborative Reading』（共創的読み）を中心に」香月正登・長安邦浩編著、中国・国語教育探究の会著『アクティブ・ラーニング型発問づくり』，明治図書，2017.  
岸本憲一良：「『提案読み』による説明的文章の授業デザイン」岸本憲一良・中野登志美監修、花岡鉄平・住江めぐみ編著、中国・国語教育探究の会著『小学校国語科「提案読み」「批評読み」の課題・発問モデル』，明治図書，2021.
- 11 余郷裕次：『絵本のひみつ』，徳島新聞社，p6、p8，2010.
- 12 11に同じ。p16～17